

芭蕉臨終記 花屋日記 文暁

「やぶちゃん注・真宗僧で俳人の文暁（文暁 享保二〇（一七三五）年～文化一三（一八一六）年：俗姓は藁井。肥後八代の真宗仏光寺派正教寺（熊本県八代市本町に現存）住職。蕉風俳諧の復興に尽力した僧蝶夢らと親交があり、小林一茶は彼を慕って寛政四（一七九二）年暮から三ヶ月に渡って同寺に滞在したという。）の著になる「芭蕉翁終焉記 花屋日記」（文化八（一八一二）年刊）は上下二巻。上巻には芭蕉の発病から終焉・葬送に至る模様を伝える門人たちの手記を、下巻には門弟・縁者の書簡を収めるが、多量の先行資料を組み合わせて文暁が創作した偽書である。「翁反古」「芭蕉翁反古文」とも呼ぶ（なお、「翁反古」という松岡大蟻編になる天明三（一七八三）年刊の同名の芭蕉書簡集があるが、これとは別物である。因みに、この大蟻のそれも偽書である）。

正岡子規は本作を読んで落涙、「其角の書ける終焉記はこの日記などに據りて作る」「世界の一大奇書」「十數年間人の筐底にありて能く保存せられたるは我等の幸福にして芭蕉の名誉なり」（「芭蕉雑談」と絶賛（彼は真作と思っていた）、芥川龍之介が「枯野抄」を書くに当って本作を主素材としたことでも知られる（芥川は本作が偽作であることを薄々感づいていたとも、知っていて確信犯で素材に用いたとも言われる）。

今回、芭蕉の臨終の床に元禄七年のグレゴリオ暦にシククロして関連作品を電子化注釈してきたが、ここに至って、現在まで電子化が成されていない本作の電子テキスト・データ化を行った。但し、普段のように注を付け出すと、偽作だけに膨大な時間が掛かってしまうため、ベタのテキスト・データとすることとし、禁欲的に字注のみを附した。

底本は小宮豊隆校訂「芭蕉臨終記 花屋日記」（昭和一〇（一九三五）年岩波文庫刊）を用いた。ポイント落ちの文暁による頭書（一行四字）は当該箇所前後（流れを按配して何れかに【】書きの同ポイントで配した）に入れ、ポイント落ちの本文中の割注は「」に入れて同ポイントで当該箇所本文に挿入した（割注については私の判断で読み易くするために字空けを施したり、逆に詰めたりした箇所が多くある）。判読不能字は推定字数分を□で挿入した。踊り字「へ」「へ」は正字化した。編者による当該実作についての脚注は編

集権を侵害するため、省略した。本文中の「脳」など誤字の右のママ注記も無視した（基本的にそれほど違和感なく読める程度の誤字・代字の類いである）。疑義のある箇所については[国立国会図書館蔵の牧野望東・星野麦人校訂「芭蕉翁花屋日記」](#)（明治三五（一九〇二）年晩鐘会刊）を近代デジタル・ライブラリーで視認、参照校合した。字注では「国会図書館版」と略した。なお、PDF版ではソフトの限界から一部の環境依存文字の正字が横転しているのは御寛恕願いたい。また「廻」の正字は表示されないので止むを得ず、新字を用いている。【二〇一四年十一月二十六日…藪野直史】

花屋日記 文暁

芭蕉談花屋實記序

今は一むかし、此花舎某が後廳は、芭蕉翁終焉の地なり。時うつりぬれば、木はたちのびて空を支ふ。星うつりぬれば、石は沈みて人しらずなり行ぬ。元亨釋書曰、人去堺留境者也。誠なるかな此言。湊川の史巖に楠正成が戦死を聞て、齒を喰しばり涙を墮さぐる族は、忠義をしらぬ人なり。花屋の後廳、芭蕉翁の終焉の實記を見て、涕すゝ泪を拭はざる輩は、世に月花をしらぬ人なり。かゝる舊跡有て、此舊記のあきらかに傳りあること、げに風雅の冥合といはむ。是ひとへに去來先生の篤實にして、翁生涯の事實を書記しおかれしゆゑなりとぞ。かく舊き事はしたはしうこそはべれ。浪速渦みじかき蘆の草枕、松島・蚶瀉・須磨・明石、身は風雲の行方さだめず、漂泊二十年の暁の夢、こゝにてをはり給ひし面影のたちさらでのみ、千歳の後といへども朽さらまし。今風花雪月にあそびて翁を慕ふともがらは、此不可思議なる三生値遇の因と縁とを感仰すべし。

文化七秋八月五日

東肥乞隱文暁識

翁反故 上 花屋日記

肥後八代 僧文暁 著
浪 速 花屋菴奇淵校

【松風の軒をめぐりて秋くれぬ はせを】

九月廿一日 泥足が案内にて、清水浮瀬の茶店に勝遊し給ふ。茶店の主が需に短尺杯書て打興じたまふ。泥足こゝろに願ふことあるによりて、發句を乞ひければ

所思

此道やゆく人なしに秋のくれ 翁

峽の畠の木にかゝる蔦 泥足

歌仙一折有略

【毎年九月廿一日浮瀬四郎右衛門亭にて松風の會式あり。花屋菴より執行ふ。此一折の俳譜芭蕉袖草紙にあり。】

連衆十人なり。短日ゆゑ歌仙一折にて止む。今度はしのびて西國へと思ひたち給ひしかど、何となくものわびしく、世のはかなき事おもひつゞけたまひけるにや。此句につきて、ひそかに惓然に物がたりしたまひけり。

旅懷

此秋は何でとしよる雲に鳥 翁

幽玄きはまりなし。奇にして神なるといはん。人間世の作にあらず。其夜より思念ふかく、自失せし人の如し。雲に鳥の五文字、古今未曾有なり。(惓然記)

二十六日 園女亭也。山海の珍味をもて饗應す。婦人ながら禮をただし、敬屈の法を守る、貞潔閑雅の婦人なり。實は伊勢松坂の人とぞ。風雅は何某に學びたりといふ事をしらず。岡西惟中が備前より浪華にのぼりし時、惟中が妻となる。其時より風雅の名ますます高し。惟中が死後、江戸にくだりて、其角が門人となる。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし 翁

紅葉に水を流す朝月 園女

連衆九人、歌仙あり。別記。(惟然記)

【歌仙一卷袖草子にあり。】

廿九日 芝柏亭に一集すべき約諾なりしが、數日打續て重食し給しゆゑか、勞りありて、出席なし。發句おくらる。

此夜より翁腹痛の氣味にて、泄瀉四五行なり。尋常の瀉ならんとおもひて、藥店の胃苓湯を服したまひけれど、驗なく、晦日・朔日・二日と押移りしが、次第に度數重りて、終にかゝる愁とはなりにけり。惟然・支考内議して、いかなる良醫なりとも招き候はんと申ければ、師曰、我本元虛弱なり。心得ぬ醫にみせ侍りて、藥方いかゞあらん。我性は木節ならでしるものなし。願くは木節を急に呼て見せ侍らん。去來も一同に呼よせ、談ずべきこともあんなれば、早く消息をおくるべしと也。夫より兩人消息をしたゝめ、京・大津へぞつかはしける。しかるに之道が亭は狭くして、外に間所もなく、多人數入こみて保養介抱もなるまじくとて、其所此所(ソココ)たちまはり、われしる人ありて、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門と云者の、裏座敷を借り受けり。間所も數ありて、亭主が物數奇に奇麗なり。諸事勝手よろし。其夜すぐに御介抱まうして、花屋に移りたまひけり。此時十月三日也。(次助兵衛記)

四日 車庸・畦止・諷竹・舍羅・何中等は、師の病氣をしらず、之道亭にいたりしに、勞りたまふ事を之道より聞侍りて、花屋にまゐる。

病氣不□□□につき、間尋の人たりとも、慢りに座敷にとほる間敷と、張紙を出す。且、仁左衛門に斷り置事。(次郎兵衛記)

【鼠の尿に腐りて見えず。以下度々あり。】

「やぶちゃん字注」：「国会図書館版」では不明字は二字。「間尋」の右に「カンジン」とルビする。」

扣帳〔座敷人用品調取覺竝座敷付之道具品々覺〕

次郎兵衛

戊十月四日

「やぶちゃん字注」以下、底本では二段組みであるが、上段↓下段↓(次行同)の形で示した。また底本では本文同ポイントであっても疑義のある箇所は国会図書館版で視認、割注に変えたものが多くある。」

- 一 机一脚
- 一 硯一面 [墨 一挺 水入 小刀]
- 一 煙草盆二口 [火入 灰吹 きせる]
- 一 帚 二本
- 一 夜具五流 [壹具 絹 四具 木綿]
- 一 枕 五ツ
- 一 膳十人前 [椀猪口皿添]
- 一 竈 三口
- 一 釜鍋 [一口 三口]
- 一 火箸 三
- 一 茶瓶掛 二口
- 一 火鉢 二口 [火箸添 眞鍮]
- 一 茶碗 十
- 一 茶碗鉢 三口
- 一 薄刃庖丁 三本
- 一 藥鐘 一口
- 一 藥溜 二ツ
- 一 研木 一本
- 一 摺鉢 一口
- 一 炭斗 一ツ
- 一 水囊 一ツ
- 一 油德利 一ツ
- 一 盥 二口
- 一 手水盥 二口
- 一 行燈 二張
- 一 懸行燈 二張
- 一 挑灯 二張
- 右
- [同四目]
- 一 白米 一斗

〔同〕

一 味噌 〔三升 赤白〕

〔同〕

一 鱒 一升

〔同〕

一 薪 拾束

〔同〕

一 炭 一俵

〔同〕

一 油 一升

〔同〕

一 紙 一束

〔同〕

一 雜紙 一束

〔同〕

一 鹽 一升

右

〔二ヶ月〕

一 座敷料 三歩二朱 相渡

右 仁左衛門より受取書置

飛脚便に申遣候。老師一昨々夜より少し惡寒氣御座候處、起居不穩候。之道不勝手に候故、御不自由と存、取計候而、御堂前南久太郎町花屋仁左衛門裏座敷、奇麗閑栖に候之條借受、之道請判に而、先寓居と定候處、今朝者別而御氣分無心元御樣體に候。醫者呼申筈に候得共、早く木節に御樣體御見せ被成度との御事被仰候條、即木節に別紙遣候。此狀著次第、貴雅にも早々御下り相待候。木節御同伴候様に存候。隨分御急可被下候。不一。

十月二日

惟 然

支 考

去 來 様

猶々別紙急々木節に御届頼存候。以上。

今朝之狀、相達候哉と存候。老師御事、昨夜より泄痢之氣味に而俄に一變、夜中二十餘度之通氣、是は頃夜園女亭に而の、菌之御過食故と相考候。一夜之中に掌を返すが如に、今朝より猶亦通痢度數三十餘度、我等始、之道手を握り候迄に候。此狀著次第、木簡同伴に而急々御下り相待候。南久太郎町花屋仁左衛門と御尋、早々御入可取成候。急々。以上。

十月二日夜子ノ時

惟然

去來様

猶々、大津之衆、其外何方へも、手寄手寄御申遣可被成候。木節は急に被參候様御頼申候。伊賀への常飛脚は無之、幸羅漢寺之弟子伊勢へ越候に、今朝狀頼遣候迄に候。若其方角より幸便も候はば、被仰遣可被下候。

三日 廿七日。但晝夜也。天氣曇る。夜半過去來きたる。二日朝之狀、三日之朝届く。其座より直に打立、伏見に出しは巳の時なりし。夫より船に打乗、八軒屋に著しは亥の時なりしと。直に御病床に参りたりしに、師も嬉しさ胸にせまり、しばしはものたまはざりしが、諸國に囚し人々は我を親のごとく思ひ給ふに、我老ぼれて、やさしき事もなければ、子のごとくおもふこともなく、殊更汝は骨肉を分しおもひあれば、三三日見されば千日のおもひせり。しかるに今度かゝる遠境にて難治の菜薪の憂に罹り、再會あるまじくおもひ居たりしに、逢見る事の嬉しさよとて、袂をしばりたまへば、去來もしばしは於咽せしが、暫くして云、僕世務にいとまなければ、させる實意もつくさざるに、かゝる御懇意の御言を蒙る事、生をへだつとも忘却不仕と、數行の泪にむせぶ。何様賣藥の效驗心もとなしとて、去來又消息をしたゝめて、飛脚便に木節につかはす。(支考記)

同三日夜子の時追、つゞいて木節來る。二日出の兩人の消息其夜著せし故、大津を丑の時立、一番舟に乘しかど、短日ゆゑ遅著。諸子に會釋もそこそこにして、直に御様體を伺ひ、御脈を尋す。主方逆逸湯を調合す。(支考記)

四日 朝、木節申さるゝにより、朝鮮人參半兩、道修町伏見尾より取、同く包香十五袋取。天氣よし。之道方より世話にて、洗濯老女をやとひ、師の御衣装、其外連衆の衣装を

すゝぐ。園女より御菓子并水仙を送る。支考・惟然介抱。次郎兵衛迎も手届かね、之道とりはからひとて、舍羅・吞舟と云もの来る。按摩など承る。今日二十度餘におよぶ。度ごとくに裏急後重あり。(次郎兵衛記)

五日 朝、丈草・乙州・正秀きたる。天氣曇る。寒冷甚し。時候のゆるにや、師時々悪寒の氣あり。朝、次郎兵衛天満に詣る。晝過歸る。夜著蒲團又々五流、米壹斗、鱒壹ニ斗、鹽壹升、味噌三升、薪二十束、炭二十貫目、雜紙三束なり。今日師食したまはず。湯素麵二箸なり。夜中までに五十度におよぶ。(次郎兵衛記)

六日 天氣陰晴きはまらず。朝の貪食、入麩三箸。前夜終宵寢入たまはず。暫く睡眠したまふ御目さめより、去來をちかくめして、先の頃野明が方に残し置侍りし、大井川に吟行せし句

大堰川波にちりなし夏の月

翁

地句あまり景色過たれど、大井川の夏げしき、いひかなへたりとおもひゐたりしが、清瀧にて

清瀧や波にちりこむ青松葉

翁

と作りし。事柄は變りたれど、同巢なりと人のいはんもいかゞなれば、大井川の句は捨はべらんと汝に申たり。しかるに頃日園女に招れて

白菊の目に立てゝ見る塵もなし

翁

と吟じたり。是又同案に似て、句の道筋おなじ。それ故前の二句を一向に捨はべりて、白菊の句を残しおき侍らんとおもふ也。汝の意いかん。去來泪をうかべ、名匠のかく名を惜み、道を重じたまふ有がたさよ。絶句一章に、さまで千辛萬苦したまふ御病腦の中の御骨折、風雅の深情こそ尊とけれ。眼あるもの何者か、此句を同案・同集と見るべき。恐ながら此句を同案・同巢などと申ものは、無眼人と申ものなり。其ゆるは、此句々景情別々備りて、句意を見る時は、三句ともに別なり。かるがゆるに、我は句の意を目に見て、句の姿を見ず。青苔日ニ厚シテ自ラ無塵。これはこれ陰者の高儀をほめたる語、今は園女がいまだ若くして、陌上桑の調(ミサホ)あるをほめたまひたる吟なり。意も妙なり、語も妙なり。

世人此句を見るもの、園が清節をしらん。波に塵なしの語は、左太仲が必シモ非ニ絲ト與マ竹山水ニモ有ニ清音一いへる絶唱もおもはれ、園が二夫にまみえざる貞潔と、大井・清瀧の絶景と、二句の間相たゝかつて、感じてあまりありと申せしかば、師も機嫌よくおはしけ

り。(去來記)

七日 朝より不相應の暖氣なり。曇りて雨なし。藥方逆逸湯に加減。入麪を好みたまふ。園女より見舞として、菓子等贈きたる。次郎兵衛取計て之道に贈る。鬼貫來る。去來應對して還す。園女・可中・渭川來る。去來・支考會釋す。終日藥をめさず。終日曇る。夜になりて晴る。夜に入て人音もしづかになりければ、灯のもとに人々伽してゐたりければ、乙州・正秀等去來に申けるは、今度師もし泉下の客とならせたまはゞ、此後の風雅いかになり行侍らん。去來黙して居たりしが、我も其事心にかゝりしゆゑ、二日の消息届し故、かくいそぎ参りたり。人々もさおもひたまふや。さあらば今夜閑靜なり。只今の體におはしまさば、御快復おぼつかなし。滅後の俳話をとひたてまつらんとて、靜に枕上に伺ひよりにて、機嫌をはからひ問申けり。翁、次郎兵衛にたすけおこされ、息つきたまひてのたまはく、俳語の變化きはまりなし。しかれども眞・行・草の三ツをはなれず。其三ツよりして、千變萬化す。我いまだその轡をめぐらさず。汝等此以後とても、地をはなるゝ事なかれ。地とは、心は杜子美の老をおもひ、さびは西上人の道心をしたひ、調は業平が高儀をうつし、いつまでも、我等世にありとおもひ、ゆめゆめ他に化せらるゝ事なかれ。言たき事あれども、息□□口かなはずと、喘ぎたまひければ、吞舟御口を潤す。又藥をまゐらせしてしづまりたまふ。各筆をとりてこれを書く。(惟然記)

「やぶちゃん字注…国会図書館版は判読不能字を「□□□□」(最後は四角ではなく「□」なので注意されたい)と三字分とする。」

八日 天氣快晴。御不全なり。京の□士來る。信徳より消息もて、御病體を問ふ。同近江の角上より使來る。人々勝手の間にて、今度の御所勞平復を祈り奉らんとて、住吉大明神に連中より人を立べしと、去來申おくらければ、各しかるべしと、之道・次郎兵衛は鬮當にて、社務林采女方に祝詞をたのみ、厚く神納の品々おくらる。

各詠

奉納

落つきやから手水して神あつめ 木節

初雪にやがて手ひかむ佐太の宮 正秀

峠こそ鴨のさなりや諸きほひ 丈草

起さるゝ聲もうれしき湯婆哉 支考

水仙や使につれて床はなれ

吞舟

居あげていさみつきけり鷹のかほ

伽香

あしがろに竹のはやしやみそさゞい

惟然

神のるすたのみぢからや松の風

之道

日にまして見ます顔なり霜の菊

乙州

こがらしの客みなほすや鶴の聲

去來

大勢の集會なりければ、よろこび興じて師を慰め申けり。木節、去來に申けるは、今朝御脈を伺見申に、次第に氣力も衰給ふと見えて、脈體わろし。最初に食滯より起りし泄瀉なれども、根元脾胃の躡にて、大虚の痢疾なり。故に逆逸湯主方なり。猶又加減して心を盡すといへども、藥力とゞかず。願はくは、治法を他國にもとめんとおもふ。去來、師にまうす。師曰、木節が申條尤なれども、いかなる仙方ありて虎口龍鱗を醫すとも、天業いかなかせん。我かく悟道し侍れば、我呼吸の通はん間は、いつまでも木節が神方を服せむ。他に求むる心なしとのたまひける。風流・道徳人みな間然することなし。

支考・乙州等、去來に何かさゝやきければ、去來心得て、病床の機嫌をはからひて申て云、古來より鴻名の宗師、多く大期に辭世有。さばかりの名匠の、辭世はなかりしやと世にいふものもあるべし。あはれ一句を残したまはゞ、諸門人の望足ぬべし。師の言、きのふの擧句はけふの辭世、今日の擧句はあすの辭世、我生渡云捨し句々、一句として辭世ならざるはなし。若我辭世はいかにと問人あらば、此年頃いひ捨おきし句、いづれなりとも辭世なりと申たまはれかし。諸法從來常示寂滅相、これは是釋尊の辭世にして、一代の佛教、此二句より外はなし。古池や蛙とび込水の音、此句に我一風を興せしより、初て辭世なり。其後百千の句を吐に、此意ならざるはなし。こゝをもつて、句々辭世ならざるはなしと申侍る也と。次郎兵衛が傍より口を潤すにしたがひ、息のかぎり語りたまふ。此語實に玄々微妙、翁の凡人ならざるをるべし。(支考記)

「やぶちゃん字注・国会図書館版では「□士」の判読不能字は二文字。惟然坊の句「あしがろに竹のはやしやみそさゞい」の下五は「鷓鴣」と漢字表記。」

夜に入て嵯峨の野明・爲有より柿を贈り來る。消息そふ。今日まで伊賀より音信なし。去來・乙州申談じ、態と飛脚を差たつべきよし師に申ければ、師の言、我隱遁の身として躡躡なる身の、數百里の飛杖おもひ立、親族よりとゞめけれど、心儘にせしは我過なり。今大病と申おくりなば、一類中のさわぎ、殊に主公の聞しめしも恐あり。たとひ今度大切

におよぶとも、沙汰あるまじとのたまひけり。師の慮の深きこと各感心す。度数六十度におよぶ。(惟然記)

九日 諸子の取はからひとして、ふるき衣装又夜具などの、垢つきたる不淨あるを脱かはし、よき衣に召せかへまゐらせ申。師曰、我邊地波濤のほとりに、革を敷寐、塊を枕として、終をとるべき身の、かゝる美々しき褥のうへに、しかも未來までの友どちにぎにぎしく、鬼録に上らむこと、受生の本望なり。丈草・去來と召。昨夜目のあはざるまゝ、不斗案じ入て、吞舟に書せたり。各詠じたまへ。

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

枯野をめぐる夢心ともし侍る。いづれなるべき。これは辭世にあらず、辭世にあらざるにもあらず。病中の吟なり。併かゝる生死の一大事を前に置ながら、いかに生涯好みし一風流とは言ながら、是も妄執の一ツともいふべけん。今はほいなし。去來言、左にあらず。日々朝雲暮雨の間もおかず、山水野鳥のこゑもすてたまはず。心身風雅ならざるなく、かくる河魚の患につかれ給ひながら、今はのかぎりに其風神の名章を唱へ給ふ事、諸門葉のよろこび、他門の聞え、末代の龜鑑なりと、涕すゝり泪を流す。眼あるものはを見れば、魂を飛ばむ。耳あるものはをきかば、毛髮これがために動かむ。列座の面々、感慨悲想して、慟絶して、聲なし。是師翁一代遣教經なり。此日より殊更におとろへたまへり。度数しれず。(去來記)

十日 初時雨せり。師、夜の明がたより度数しれず、ひとしほ脳みたまへり。折ふしに語一言ありて、とりしめなきこと多し。木節此日芍薬湯をもる。諸子打より、食事をすゝめまゐらせけれど、すゝみたまはず。梨實をのぞみたまふ。木節かたく制しけれど、頻りに望みたまふゆゑ、やむことを得ずすゝめければ、一片味ひてやみ給ふ。木節云、脾胃うくる處なし、死期ちかきにありと云。申の刻にいたつて人ごゝちつきたまふ。今日は一人も食したるものなし。(惟然記)

十一日 朝またまた時雨す。おもひがけなく、東武の其角きたる。是は東武の誰彼同伴にて參宮の序、和州・紀州を打めぐり、泉州より浪華に打入りしが、はからずも師の勞りおはずと聞つけ、そこ此處とたづねまはり、漸にかけつかけたり。直に病床にまゐりて、皮骨連立し給ひたる體を見まゐらせて、且愁ひ且よろこぶ。師も見やりたまひたるまでにて、

唯々泪ぐみたまふ。其角も言句なく、さしうつむきみたりしを、丈草・去來支考其外の衆、次の間に招き、御病性の始終を物がたる。此夜、夜すがら伽して、おもひよりし事ども物がたり居たりしに、亥のときごろより、師、夢のさめたるごとく、粥を望みたまふ。人々嬉しさがぎりなく、次郎兵衛取計ひて、疾く焚あげてすゝめまゐらす。中かさ椀にて、快くめされけり。朔日より已來の食事なり。土鍋に残りたるを、去來椀にうつし入ておしいたゞき

病中のあまりすゝりて冬ごもり

去來

去來曰、趣向を他にもとめず、有あふことを口ずさみて、師を慰めまゐらせん。深く案じいら□と頓に句作りたまへ「やぶちゃん字注：「□」の部分は底本では『一字不明』と注する。国会図書館版では「案じいらすと」と活字化している。」。惟然は前夜正秀と二人にて、一ツの蒲團をひつぱりて被りしに、かなたへひき、こなたへひきて、終夜寢いらざりければ、はてはしらじらと夜明けけるにぞ、其事を互に笑ひあひて

ひつぱりて蒲團に寒きわらひ哉

惟然

おもひよる夜伽もしたし冬籠

正秀

一座是をき上し、いづれもどつと笑ひければ、師も笑ひたまへり。人々嬉しさがぎりなく、十日已來の興にぞ有ける。初しぐれなりければ【初しぐれといふより四行 十一日の晝うちのことゝ見るべし】、空とく晴て日影さしいりたるに、蠅のおほく日南に群りゐたるに、人々鬩もて蠅をさし取に、上手下手あるを見給ひて、暫く興にいりたまひけれど、大病中のことなれば忽倦たまひ、直に寢所に入たまふ。支考は、師の發句を減後に一集せん心願あれど、此ごろの病苦に脳みたまふに見あはせめたりしが、今日機嫌よきに案じて申出侍らんと、去來に申たりければ、去來はかねて師の心中を知りたりしゆゑ大にいかり、小ざかしき事を申さるゝもの哉、師は平生名聞らしきこと好み給はず。今日漸快き體を見請はべりて、諸人嬉しとおもふ中に、御氣に逆ふこと聞せ申ては、御心を勞しめ申事、奇怪なり。此後御病床ちかくより給ふな、早く其座を立たまへと、聲あらゝかに次の間に追立けり。支考もはからずものいひ出して、諸子の聞前目をうしなひしが、行々惟然に打むかひ、我に句あり、そこ書給へといひて

しかられて次の間にたつ寒かな

支考

さすが支考なりければ、師もほの聞給ひて、おかしがり給ひけり。

鬩とりて菜飯□□□□□□□□

木節

皆子なり□□□□□□□□□□

乙州

【この二行腐て見えず。枯尾花集に 鬮とりて菜めしたゝかす夜伽哉　みな子也みの蟲
寒くなきつくすとあり。「やぶちやん字注…国会図書館版では「鬮とりて菜飯たゝかす夜伽
哉」「皆子なりみの虫寒くなきつくす」とある。】

うづくまる薬のものと寒さかな　丈草

吹井より鶴をまねかむ初しぐれ　其角

一々惟然吟聲しければ、師、丈草が句を今一度とのぞみ給ひて、丈草出かされたり。い
つ聞てもさびしをり調たり。面白し面白しと、しはがれしこゑもて譽給ひにけり。いつに
かはりし機嫌の麗しきをよろこびけるに、木節一人愁をいだける體に見えければ、其角其
故をとふ。木節云、病に除中の證といへるあり。大病中絶食なるに俄に食のすゝむことあ
るは、悪症なり。死期遠きにあらずといへり。さはしらず各さゞめきあたるに、夜半ごろ
より又寒熱往來ありて、夜明ごろより顔色土のごとく見えたまひ、暫くは悶亂し人も見し
りたまはざりしが、やゝあつて又實證になりたまひ、左右に舍羅・吞舟、うしろよりは次
郎兵衛いだきまゐらせて介抱し、程なく夜明ければ十二日なり。兼ては閉籠り給ひしが、
へだての障子も襖もとりはなさせ、其角・去來・丈草を是へとて向に見給ひ、穢をはゞか
れば咫尺したまふなどことわり、行水を望みたまふ。木節頻りに制しけれど、しきりに
のぞみ給ふゆゑ、やむことを得ず、湯をひかせまゐらせけり。座をしづかにあらため、木節
が醫術を盡されし事などつとくに謝し給ひ、扨三人の衆を近くめされ、乙州・正秀を左右
にし、支考・惟然に筆をとらせ、なきあとの事こまごまと遺言したまふ。病苦すこしも見
えたまはず。人々奇異のおもひをなしけり。伊賀の遺書は手づから認めたまひ、外に京・
江戸・美濃・尾張もれざる様に遺言しをはりたまふに、始終は門人中にて筆記す。次第に
聲細り、痰喘にて□□ひければ、次郎兵衛素湯にて口を潤しまゐらせけり「やぶちやん字
注…国会図書館版は判読不明字を三字とする」。やゝ有て去來にむかひたまひ、先頃實永
阿闍梨より路通が事を仰有。其後汝が丈草・乙州等に送りし消息、露霜とは聞捨ず。併少
しいみはゞかること有て、雲井の餘所にはなし侍りぬ。彼が數年の薪水の勞、努々わすれ
おかず。我なき跡には、およそに見捨たまはず、風流交り給へ。此事たのみ置はべる。諸
國にもつたへ給はれかすと、言終りたまひて餘言なし。合掌たゞしく觀音經ときこえて、
かすかに聞え、息のかよひも遠くなり、申の刻過て、埋火のあたゝまりのさむるがごとく、
次郎兵衛が抱きまゐらせたるに、よりかゝりて寐入給ひぬとおもふ程に、正念にして終に
屬曠につき給ひけり。時に元祿七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十一歳なり。

即刻不淨を清め、白木の長櫃に納まゐらせ、其夜直に川舟にて伏見まで御供し奉る。其

人々には、其角・去來・丈草・乙州・正秀・木節・惟然・支考・之道・吞舟・次郎兵衛・以上十一人。花屋仁左衛門が京へ荷物を送る體にて、長櫃の前後左右をとりまき、念佛誦經おもひおもひに供養し奉る。八幡を過る頃、夜もしらしらと明はなれけるに、僧李由の下りたまへる舟に行逢ければ、いざとて乗移り、相ともにはかなき物がたりして、程なく京橋につく。夫より狼だに通りにかゝり「やぶちゃん字注・国会図書館版では「狼谷」と漢字表記。」、急ぎにいそぎしほどに、十三日巳の時過には、大津の乙州が宅に入れたてまつりけり。乙州は伏見より先立ていそぎて歸り、座敷を掃除しきよめ、沐浴の用意す。御沐浴は之道・吞舟・次郎兵衛也。御髪の延びさせたまへば、月代には丈草法師まゐられけり。御法衣・淨衣等は、智月と乙州が妻縫奉る。淨衣、白衣にて召させ參らすべき筈なるを、翁はいかなる事にや、兼て茶色の衣装こそよけれど、すべて茶色を召れければ、智月尼のはからひとして、淨衣も茶色の服にこそせられける。さて送葬は十四日と定り、彼は日没になりけり。

大坂花屋より支考・惟然が二日に仕出の葎、羅漢寺の僧伊勢に急用有て參るよしを、花屋よりしらせければ、是幸ひと頼つかはしけるに、此僧奈良に著たる日より、痢疾にて歩行かなはず、やむことを得ず奈良に滞る。夫故十一日朝、伊賀上野に行人あるを聞つけ、れば、右の葎を仕出しけり。此狀、十二日の暮ごろに上野に届きけり。土芳・卓袋ひらき見るより大に驚き、とる物もとりあへず松尾氏に參りたれば、是も同時に書狀著せりと云。夫より兩人は、したためそこそこにして、子の刻過より、兼て案内しりたる近道にかゝり、大和の帯解までたゞいそぎに急ぎけれど、月入ての事なれば、くらははくらし、小路の事ゆゑ、挑灯も消ぬれば、其夜の明がたに帯解に著く。相知れる方に暫らく休らひて、したゝめなどし、是よりくらがり峠を越れば、大坂までは八九里には過ず。さらばとて、足にまかせてくらがり峠を越え、俊徳海道をたゞ急にいそぎ【今の地方を以て見れば、くらがりの峠をこして俊徳街道に出ず。十三峠とくらがり峠をおもひ誤れるなるべし「やぶちゃん字注・国会図書館版では「地方」は「地圖」となっており、「くらがりの峠をこして俊徳街道に出ず」の箇所は「くらがり峠をこして俊徳街道に出ず」となっている。後者は「越しては」の誤植かとも思われる。】、平野口より御城の南をかけぬけ、直に久太助町花屋にかけつけたるは、十三日の暮頃なり。何がなしに、翁の御病氣いかにと問ければ、仁左衛門しかじかと答ふ。爾人ともに残念まうすばかりなく、さらば葬送なりとも逢ひたてまつらんとて、又ひきかへし、八軒屋にかけ行。幸ひ出船ありければ、其まゝ飛乗り、伏見

京橋に著しは夜明也。直に飛下り狼谷にかゝり、義仲寺に著しは、未入棺し給はざるまへなりければ、諸子に斷りて、死顔のうるはしきを拜しまゐらせ、悲歎かぎりなく、一夜も病床に咫尺せざる事をかきくどきけれど、まづ因縁の深きことを身にあまり有がたく、嬉しく焼香につらなりけり。(「土芳・卓袋」物語)

十二日暮に伏見を出見したる臥高・昌房・探芝・牝玄・曲翠等は、其夜何處にて行違ひたるやらん、夜明て大坂に著。直に花屋にはせたるに、諸子御骸を守り奉りて、のぼり給ひぬと聞より、直に又十三日の晝船に大坂より引かへし、其夜酉の刻にふしみにつく。夜半頃に大津に歸る。(昌房物語)

義仲寺眞愚上人、住職なれば導師なり。三井寺常住院より弟子三人まゐられ、讀經念佛あり。御入棺は其夜酉の刻なり。諸門人通夜して、伊賀の一左右をまつ。夜に入ても左右なし。去來・其角・乙州等評議して、葬式いよいよ十四日の酉上刻と相究む。晝のうちより集れる人は雲霞のごとく、帳にひかへたる人數凡そ三百人餘。しるしらぬ近郷より集る老若男女までをしみ悲しむ。時しも小春の半にて、しづかに天氣晴たわり、月清明として湖水の面にかゞやき渡り、名にし粟津のまつに吹起るは、無常の嵐かとおもはれて、月はおもしろきもの、露は哀なるものといへれど、折にふれては何かあはれ成ものならざらむ。矢橋の漣のよするひゞきも、愁人のためには胸にせまり泪を添ふ。(支考記)

引導香語

雪月魂魄。風花精神。等閑一句。驚動人天。嗚呼。奇哉芭蕉。妙哉芭蕉。萬里白雲。一輪明月。五十一年。一字不説。

各捻香

丈草	其角	去來	李由	曲翠	正秀
木節	乙州	臥高	惟然	昌房	探芝
泥足	之道	芝栢	牝玄	尚白	土芳
卓袋	許六	丹野	風國	野童	遊刀
野明	角上	胡故	蘇葉	靈椿	素顰
回鳧	萬里	鬮々	這萃	荒雀	楚江
木枝	朴吹	魚光	支考		

諸國代香不記

右の外近江國中は申に及ばず、京・大坂・美濃・尾張・伊勢・其外國々より京などに登りみたる諸國の人々、三世値遇の齏をよろこび、我も我もと香手向奉る。其數何百人といふ數しれず。境内狭ければ、表より入たる人は裏へぬけ出るやうにしつらひ置、田の刈跡に道をつければ、焼香の人々はすべて裏へぬけゝるにぞ、さして騒がしき事もなく、葬埋をはりけるは、子の時過になりける。翁かねて遣命の通り、木曾殿の右のかたに埋葬し奉りけり。

十五日 去來・其角はじめ、膳所・大津の人々、朝疾詣して、先とて土かきあげて卵塔をかたどり、幸ひ塚のうしろに、年ふりたる柳あるをそのまゝにし、御名の形見とて、枯々の芭蕉を一本、兼てこのみ給ひたる茶の木の、今を盛りなる花とともに移し植て、竹もて垣ゆひまはし、香花を手向奉りけり。日のもと廣しといへども、生前に其名豊葦原の浪に響き、其徳芙蓉の絶頂に竝ぶ。人丸・赤人のむかしはいざしらず、末代の今にしては實に我翁一人といふべし。

御先に立候段、残念に可被思召候。如何様とも又右衛門便に被成御年被寄、御心靜に御臨終可被成候。至爰申上事無御座候。市兵衛・治右衛門殿・意専老初、不殘御心得奉頼候。中にも十左衛門殿・半左殿、右之通に候。はゞ様、およし、力落し可申供。以上

十月十日

桃青

(花押)

松尾半左衛門様

新藏は殊に骨被折忝候。

【此一軸再形庵什物。】

【市兵衛 雪芝 事】

【治右衛門 苔蘇 事】

【意専 猿雖 事】

【十右衛門 半殘 事】

【半左衛門 士芳 事】

翁反故上_畢

翁反故下 花屋日記

十六日 乙州亭に集合して、義仲寺の住持、其外僧徒に禮物、御遺物等の沙汰におよぶ。

昨夜迄大に御苦勞被成候。扱今日は先師御遺言之通、御遺物夫々配分仕度、其外寺納等之義申談度、且亦伊賀より一向に返事も無之、至而不審に存候。態と人差立申渡に付、拙夫一人之名目少憚存候故、御連名に加入申度、是等之義及御談合度、又明後日一七日に候條、諸國連中退散無之中、於御靈前御追悼俳諧百韵興行仕度、付而者御終焉之記一章貴雅御書被成度、右膝々可申談間、只今より御出座可被下候。萬端は面上可申上候。以上。

十月十六日

去來

其角 英雅

御書翰拜讀、御念之御事共忝候。此間之御辛勞難盡筆頭。扱とよ今日は諸君御集會、先師御遺言之御遺物配分、且寺納其外之勘定可被成旨、又伊賀への御文通に付、拙者立會申候様被仰聞候趣、畏候。早速馳參可申候得共、今日は宿主曲翠子始臥高・正秀・泥足同心仕、先師御舊跡の幻住庵に罷越、椎の冬木も見、御筆跡の一字一石塔も拜申度、前諾仕置、則唯今出立仕にて候。乍御不口御宥免可被下候。御遺物其外寺納等之事は、乙主人、諸風子に御談可被成候。伊賀への御紙面拙者御連名可被成旨、随分御同意仕候。

一 御終焉記之義被仰聞いかゞ可仕哉。併貴命之事に候故、取懸り見可申候。御病氣最初よりの御様體、貴兄始惟然・支考が覺書勿論、御夜伽の發句等、御書付御見せ可被成候。且次郎兵衛日記、共に御見せ可被成候。出立早々。以上。

十月十六日

其角

去來英推

【終焉記 枯尾花集といふに有。】

【次郎兵衛日記は芭蕉談四篇目也追て刻すべし。】

十七日 乙州亭。

- 一 眞愚上人 金一兩
- 一 御齋米料 同一兩
- 一 御供養料 同一兩
- 一 御茶湯料 同百匹
- 一 御弟子觀門子 同百匹
- 一 三井寺常住院御弟子二人 同二百匹
- 家來衆三人 銀三兩

御遺物

- 一 出山佛一體 御長一寸一分
- 一 鐵如意一本 〔佛頂禪師より附與。長サ押延て凡一尺九寸位。頭蔦葉形り、金箔。木曾寺にあり。丈草に附與。〕【今長崎にありといふ。】

一 觀音經

- 一 紙縷袈裟 〔佛頂禪師より附與〕

〔やぶちゃん字注…底本では同ポイントであるが、国会図書館版で確認、前の「鐵如意」の記述からも割注と判断した。後の「木硯」も同じ。〕

- 一 被風
- 一 銅鉢
- 一 木硯 〔檜木にて旅硯也〕
- 一 古今集序註 一部
- 一 百人一首 一部
- 一 新式 一部
- 一 奥之細道 一部
- 一 御笠 一蓋
- 一 菅蓑 一被
- 一 御杖 一本

〔右紙縷袈裟より以下七品は、兼て惟然に御附與之御約諾のよしに候故、直に惟然に附與。〕【惟然に附與ありしものは、今 播磨増井山の麓 風羅堂に納る。】

- 一 御頭陀 一

〔中に杜子美詩集・山家集・外に後猿蓑と題ありて、歌仙三卷、發句四五吟程。外は御書捨の反故等入。別に紙に包たる布裂、五寸に六寸許。上包に狹ノ細布と有。進上清

風と。又外に和歌の古短尺二枚、松島蚶潟ノ繪二枚。【此狹ノ細布、蚶潟の畫は今文曉が祕藏す。】

右の中、紙に包たる五寸に六寸の布裂并松島蚶潟之畫、若御支無御座候はゞ、御形見下拙に被仰付可被下供様奉希候。生涯寶物に仕度候。

去來

十八日 於義仲寺追善之俳諧百韵滿尾す。鳥羽の文臺・松風の硯寫の木硯。連衆四十三人。【此百韵枯尾花集にあり。】

態壹人差立候。益御平安可被成御座奉恭賀候。皆共無異罷在候。御安意可被下候。然者、尊師於大坂御大病之處、支考・惟然より申進候得共、御返答無御座。遠路故紙面遲著と察候。兎角仕候中、拙者共も罷下り、加御保養候へ共、御養生不被爲相叶、去十二日終に御遷化被遊候。旅中之儀に御座候故、其夜早速近江木曾寺に尊骸を奉遷、十四日迄御報奉待候へ共、御返答不承候間、諸國門人中一等評義に而、則十四日之夜、於木曾寺埋葬仕候。委曲は追々土芳・卓袋歸國之上に而御承知可被下候。

一 別封之一書老師翁御遷化之日、御認被遊候御遺書に而御座候。上書迄に而御封緘者其時より無之候條、左様被思召御落手可被下候。

一 御遺物之品々者、諸國連衆於義仲寺集會之上、書記之通無相違候條、今度御來臨も御座候はゞ、御見届之上任御取計申筈に候得共、御左右無御座候故、不得止取計置目錄入御覽申候。御親類方にも乍憚此旨被仰達可被下候。土芳・卓袋歸國口述之上、御返事被成可被下候。一七日御追善供養相仕廻申候故、諸士高引取申候筈に候條、願は御返書承り申度候。書餘兩雅子に御聞可被下供。以上。

十月十九日

去來

其角

松尾半左衛門殿

別啓。昨日之俳諧百韵入貴覽候。

一 御遺物目錄之外に左之通相殘居候品、御綿入〔一著〕御袷〔同前〕御肌付〔同前〕御帶〔二筋〕、右は花屋仁左衛門より一昨日次助兵衛方に贈參候。外に古御衣裳

之類數多在之候は、大坂出立取急候故、不殘花屋に預置申候。

一 御飛脚只今參著被致候。尊翰拜見仕候。御返事仕候筈に候得共、用相認□申候故、貴答不仕候。

「やぶちゃん字注…判読不能字は国会図書館版では二字。」

一 壽貞子次郎兵衛、御國出立之砌より御供仕居候。御病中始終御葬埋之節迄、拔群之骨折被仕候。逐一兩雅より口述に可及候。御病中間之始末、御病體、惟然・支考・次郎兵衛、

拙者迄筆記入貴覺候。已上。

巨細之御書翰恭拜誦、御揃益安泰被成御暮候之由奉遙賀候。然者今度芭蕉事、於大坂致遷化、自病中木曾寺至葬埋候迄、不淺御苦勞被成候由、御文面と申、土芳・卓袋よりも微細に致承知候。惣御連中、別而兩雅丈之御厚情之程、御禮難申盡候。芭蕉事、一所不住之境界に候條、可斯有とは兼而思儲居候得共、今更殘念御推察可被下候。併病中始終御介抱之事、縱令親族之面々附添居候共、斯迄手は届不申、亡弟身に取て、他方之聞え、親類中之美目、身に餘り奉存候。

一 自大坂兩度之御手簡の中、二日の御狀而已漸十二日之暮方に届候。外之御狀者未相届不申候。芭蕉病氣大切成義と爲御知候故、早速使者差出候。最早日限過候得共、未病氣に而有之と許存候。使之者歸り候は、十六日の朝罷歸候而、其時遷化之事も、遺骸迄近江之様に送方被成候義も致承知候。卓袋・土芳近江之様被參候義も、今度承り候之故、追取返し一人差立候。今度は拙者馳參申筈に候得共、亡弟爰許發足之跡に而、拙者瘡疾勞、而も初瘡と申、老人之事に候故、長々相痛、漸九月下旬致快氣候。瘡後今以服藥いたし、出勤も不仕、氣力も未得不申候。不能其義、諸風子之御聞前恥入申事に候。

一 芭蕉遺狀慥に致落手候。誠に一類中打寄開封、何も一字一涙愁傷御思察可被下候。

一 亡者遺物之儀に付被仰越候趣、御入念之御事に候。併亡弟入道以來者、俗縁之表向無之候。僧分之器材之事に候條、遺言之品者格別、其外は不俵何品、直に義仲寺に寺納共に而可有之哉。夫□□猶又御連中任思召候間、御存寄次第宜御取計可被下僕。

一 壽貞子次郎兵衛事、今度信切之骨折、始終之事感入候。存寄も有之候。勿論譜

代之者に候故、其元諸事相仕廻申候はば、一日成共早罷歸候様、乍慮外被仰入可被下候。

一 相殘居候と有て、古衣裝四品被贈下慥に致落手候。外に古衣裝之類花屋に預被置候由、右之品者必御貪著被下間敷、其儘に被召置可被下候。餘情拜顔申殘候。以上。

十月廿三日

松尾半左衛門

命清判

晉 其角様

向井去來様

御連中 様

追啓。御飛脚道違に而踏迷申され、殊に痛所有之由に候間、中一日手前にとゞめ申候。爲念申遣置候。以上。

別啓申遣候。芭蕉死去之事、拙者主各、同役共を以申達候處、主公甚殘念に被存趣、夫に付辭世共じや無之哉之事被尋候故、土芳・卓袋口述之通申達候得者、貴丈方之紙面直に可被披見との事、任其旨申候處、重而尋に、命終迄に發句は無之哉、若有之候はゞ直書見度と申事に候。若貴丈方、外々御所持之方も候はゞ、暫く拜借申度候。此段御頼申候。

一 自筆之山家集有之候はゞ、書入杯は無之哉。右條々宜御頼申候。爲其重而如是御座候。謹言。

十月廿三日

松尾半左衛門

其角様

去來様

奥書之頭陀之内之品之中、五寸に六寸之切之事、并に松島蚶瀉之繪之事、御望の由、其外何品によらず、隨分御勝手次第に可被成候。少も不苦候。以上。

以使札得芳意候。向寒之節に候得共、益御安泰、御寺務可被成恭賀候。拙者無別條罷在候。然者芭蕉居士被致遷化候砌、葬式之節者、段々御苦勞被成下、忝奉存候。

早速罷越、御禮詞等申述候筈に御座候得共、乍存疎略打過、背本意候。此段御宥恕被成可被下候。隨而左之通□□納仕候間、宜御回向被可被下候。拙者も長々の病後、今以引入居申候故、出勤任候得者、早速墓參可仕候。其節拜顔之上萬々可申上候。先右之御禮詞迄、如斯御座候。以上。

十一月二日

松尾半左衛門

義仲寺様

覺

- 一 御布施 金二百疋
- 一 同御佛米御齋米料 同二百疋
- 一 同御茶湯料 同百疋
- 一 御布施 同百疋〔松尾氏一類中〕

「やぶちゃん字注」：「松尾氏一類中」は底本は本文同ポイントであるが、国会図書館版により割注とした。」

右

以飛札御意申候。益御清雅奉賀候。爰許無異に居申候。然者、師翁遷化之事承り、途方に暮候。いかに成行可申哉。只闇夜と相成。唯愁涙迄に候。取あへず一句案候。靈前に御敬手可被下候。以上。

十月廿三日

露 沾

去來雅丈

告て來て死顔ゆかし冬の山

露 沾

此外、諸國之弔儀數百ヶ所、繁雜故に除之。

頃日土芳・卓袋歸郷之砌申遣候筈之處、取紛失念仕候故、今日壹人差立申候。先以、長々之御所勞、未御快無御座段、乍憚隨分御自愛專一に奉存候。此間兩雅丈より被成御聞候通、亡師一七日、於御靈前御追善之百韻、首尾能興行に相成、何れも満足仕候。然者其席に御傳來之鳥羽之文臺立申候【鳥羽文臺 今長崎にありといふ】。右此文臺之事者、御聞及も候半、季吟老人より亡師に御讓之、風雅傳來之雅物に御座候。根元玄旨法印より紹巴に御傳被成、貞徳・貞室・季吟・亡師と傳り候。如斯

之重器に候得者、亡師一代尋常之俳席には御用も無御座、深川之重器と承り候迄に候。然るに先年猿蓑集撰成就仕、吟聲之砌、深川より御取寄に相成、其儘に義仲寺に被召置候。亡師も御門人の中に御傳可被成御心にも可有御座候共、亡師者一體此俳詣之事、左様成俗事に御貪著被成候御氣象にては無御座、全體隱逸禪中風雲之行弄に候得者、傳ん不傳之處にては無御座候。併此後者其場にては濟不申、今度此儘に打捨置候得者、一道者立不申、永芭蕉門埋れ候歟共存候。幸ひ此節其角參り居られ候故、於江戸、其角・嵐雪と申ては、亡師左右之御手と被思召、無二之御愛弟に而御座候。夫故、御靈前に而右文臺讓之事、申開候得者、其角頗に辭退に而、一昨日罷歸申候。許六者病身、木節者老衰、美濃・尾張者遠方に而手届不申。外に者若輩之者許。夫故先右文臺を義仲寺眞患上人に預置、一二年も過候はゞ若年之者共、追々出精之上、拔群之者も出來可申、上人に申問候得者、路傍之廢寺、風・火災、又は賊難之恐、貧地獨居故、不任心底と申候斷に而御座候。只今に而老可預置所も無御座候。道心之御人體に候得者、兎角可申入筋も無之、此上者右之雅物に候之條、少比貴方に御預り置可被下候。來春に成候はゞ、拙者參以御熟談も可仕候。則右之品此者に持せ遣候。諸事御賢察可被下候。恐惶哉齊言。

十月廿七日

向井去來

松尾半左衛門様

貴翰捧讀。先以、此間者前後之御取計、重疊御勞煩被成下忝奉存候。然者、鳥羽之文臺之事被仰聞趣、逐一承知仕候。如貴命、右文臺之事者、日外亡弟よりも承り、至而大切成雅器に御座候由、右之器物引讓之事、御心配之段、御尤千萬之事に奉存候。然るに其角能時節に參り合被居、辭退之義、手前も不承知に存候。芭蕉門人に其角・嵐雪と申事者、日本に俳諧好候者、誰不存者は無之候。然者門人中に何人か違背之御人も可有之共覺不申。右に付而者拙者より御頼も可申候得共、歸郷に成候と申事に候得者、不能其義候。且又眞患上人御返答之義者御尤之事に奉存候。將又拙者方に暫く御預可被成旨、併我等事者肉身之事候得共、俗士之事に候へ者、風流中之品物、暫も預り候境界に無之候。何分にも是は雅器之事に候得者、貴雅方に手前より御預申度候。仰之通、明春にも成候はゞ、拙者罷越拜面之上、兎も角も可仕、是非々々讓方無御座節は、季吟未御存生之事に候得者、元之通返上納可仕。とても先夫迄者、貴雅之方に御預り置可被下候。偏に奉頼候。左候はゞ、芭蕉魂魄も可爲

満足候。卓袋・土芳より始末は承申候。恐惶謹言。

十月廿九日

松尾半左衛門

命清判

向井去來様

鳥羽文臺 一脚黒塗

長壹尺九寸 幅壹尺二寸 高四寸 板厚三分 筆反壹尺壹寸

「やぶちゃん字注…以上の二行は底本と国会図書館版とをカップリングして読み易く配したものである。」

右老師嗣相承之印、季吟翁より先師に御相承被成候重器に候。今度拙者に御預可被成旨に付、慥に預置申候。後證如件。

元祿七年甲戌十一月四日 向井去來

松尾半左衛門殿

但三ヶ所疵 〔二ヶ所者小指先程、一ヶ所者小キ摺、四方之角損シ有。〕

翁反故下 畢